

和文教科書

宇治拾遺物語ぬきほ

八卷

成
年
十
七
号

共
八

ホ 2
218
8



東京大学
学芸図書

利
門
218
巻

をうけらの下
を文字のあ
きを略せら

和文教科書八之巻

美濃

源歌子

編輯

宇治拾遺物語ぬきは

樵夫歌の事

今をむらじ、木らりの山守よ、よきを取られて、
びし、心うーと思ひて、つら杖おちつきて、をりけ
る。山守見て、さるづきらとを申せ、取らせんとい
ひけれむ、

あきぎらよ、なきをとりたき、世の中よ、よき

を取られて、それいつたせんとよみけれど、山守
かへせんと思ひて、こりくとうめきけれど、え
せさうりけり。さて、よき返しをせよとせよと嬉し
と思ひけりとぞ。人もたゞ、歌をかまへてよむべ
しと見えたり。

藤六の事

今もむかし、藤六といふ歌よみありけり。下司の
家に入りて、人もなうりけるをりを見つけて、入
りよけり。鍋もある、物をすくひける程も、家ある
どの女、水を汲みて、大路の方より来て、見れど、か

く、すくひ食へむ、いうよ、かく、人もなき所に入り
て、かくをすく、物をむさるるぞ。あなうこそや、藤
六よこそいま、けれ。さうを、歌よみ給くと、いひ
けれを。

むかしより、あみご佛の、誓ひよて、はゆるも
のをむ、すくふとぞ、とこそよみうりけれ。

雀恩を報ずる事

今もむかし、春つか、日麗うなりけるよ、六十計
りの女のありけるが、蟲ちらこりて、居たりける
よ、庭よ、雀の志ありきけるを、童部、石をとりて、打

あううての上よ
石よの文字あ
て下の折られ
といふ受動詞よ
かをよす。

かろうしの下よ
よ文字のあうべ
きを略せり。
つゝむも、か
むなどあうべ
とらうられむあ
やよりよまやあ

ちふれむ、あううて、こゝをおち折られよけり。羽
をふらあうて、まごふ程よ、鳥のかけりありき
けれど、あな心う、鳥取りてんとて、此女、急ぎて取
りて、いきあうけちとて、物食をす。小桶よ入れ
て、よるををさむ。明くれむ、米食をせ、銅を薬よこ
そげて、食をせなごすれむ、子ども、孫など、あそれ
女房とて、老いて、雀おもうとて、憎み笑ふ。か
くて、日は、よくつゝむも、やうく、をどりありく。雀
の心も、かく、やうなひ生けふるを、いみづく、嬉
しくと思ひけり。あううさまよ、物へいくとも、

らん。

かろうしの下よ
よ文字のあうべ
きを略せり。

人よ、此雀見よ、物くをせよ、なごいひおきけれど、
子孫など、あそれなんごふ、雀おもうとて、憎み
笑へども、さざれ、いとほしけれむとて、飼ふ程よ、
飛ぶ程よ成りけり。今をよも、鳥よ取られとて、
外よあうて、手よす急て、飛びやす、見んとて、さ
げられむ、あうくと、飛びていぬ。女、まくの月比、日
比、暮られむをさめ、明くれむ、物食をせなうひて、
あそれや、飛びていぬるよ。又来やすらんと、見ん
など、つれぐよ思ひて、いひけれむ、人よ笑をれけ
り。さて廿日なかりありて、此女の、居らるかよ、

来つても、きつても
よむべし。くつても
よみても、来つても
ても居るぬ意子
よちりたり。

雀の、いゝく、鳴く聲、いれを、雀らそ、いゝく、鳴く
なれ、あり、雀の、来らよやあらん、と思ひて、おど
見れぬ、此雀なり。あそれよ、忘れず来らるるを、あ
それなれと、いふ程よ、女の、顔をおち見て、口より、
露を、ありの物を、おと、おくやうよ、て、飛びてい
ぬ。女、何うあらん、雀の、おと、いぬる物をとて、よ
りて見れぬ、瓢の種子を、唯どひつ、おと、て置き
らり。もて来らる、様こそあめとて、取りてもち
らり。あな、いみじ、雀の物えて、寶よ志、鈴よとて、子
ども笑へぬ、さざれ、植ゑて見んとて、植ゑられぬ、

秋よなるまゝよ、いみじく多く、生ひ廣がりて、な
べでの、杓も似ず。大きよ、多く成りらり。女、悦び
興ドて、さと隣の人よ、食をせ、取れどもくつき
もせず多うり。笑ひ、子孫も、これを、あけられ食
ひてあり。一里、くらりなごして、ちてよを、まこと
よすがれて、大きなる七八、瓢よせんと思ひて、
内よつりつけて、置きらり。さて、月頃経て、今よよ
く成りぬらん、とて、見れぬ、よくなりよけり。取り
おろして、口明けんとするよ、すこ、重し。あやし
けれど、切りあけて見れぬ、物、ひとよさ入りと

り何よりあつらんとして、移して見れを、白米の入
りたるなり。思ひわけず、あさましと思ひて、大き
なる物よ、みなを移してよ、同じやうよ、入りて
あれを、たゞ事よも、あつらひけり。雀の志するよ
こそと、あさましく嬉しけれど、物よ、入れて、かく
しおきて、残りの、杓どもを見れども、同じやうよ入
りてあり。これを、移してつうども、せんくこなく、
多うり。さて、まことよ、たのもしき、人よぞ成りけ
る。隣里の、人も見あがみいみじき事よ、羨みけり。
この隣よありける、女の子どものいふやう、同じ

給えぬの下よ、
よ文字なをあら
べ。

雀の下よ、おこ
し、なをいひ
詞の、あつべきを
略せん。
おこし、さうの
下よを、の字を略
し、う。

ことなれど、人を、かくこそあれ。はらぐしき事よ、
え志也で、給えぬ、なごいし、れて、隣の女、この女房
のものよ、来りて、さてもく、こそ、いふなりし事
ぞ、雀のなごも、ほの聞けど、よくをえ、知れぬも、
とありけんまよ、ものよ、まくとし、く、瓢の種子
を、つらねと、し、う、植ゑ、うりしより、ある事な
りこそ、細うも、い、ぬを、猶、ありのまよ、よ、細う
よ、のよ、まくと、切は、聞へを、心せ、く、隠すべき、こ
とうをと思ひて、かうく、こ、折れ、さる、雀の有り
しを、かひ、まけ、うりしを、嬉しと思ひけるよ、や、杓

のたぬを、一つ持ちて来りて、極意されむ、か
くなりしるなりといへむ、其種子、たゞ、一つたゞ
といへむ、それよりつりしる、米なども来りせん。種
子もあるべき事もあるが、更よえなん散らす
まじとて、取らせぬむ、我れも、いづれ、こゝ折れ
らん、雀見つけて、かゝんと思ひて、目をたゞ見
れど、こゝ折れしる雀、更よ見えぬ。つとめてこと
よ、伺い見れむ、せどの方よ、米の散りしるを、食ふ
とて、雀のをどりありくを、石を取りて、若しやと
ておてむ、許多の中よ、たゞびくおてむ、おのづから

おちあせられて、え飛ぶぬ有り。悦びて、よりて、こ
し、よくおち折りて、後よとりて、物食せ、薬を
せなごして、おきしり。一つが徳をだたこそ見れ。
まゝして、許多をうむ、いづれ、たのもしからん。あの
隣の女よ、たまさかりて、子どもよ、ほめられんと思
ひて、此内よ、米まきて、うかがひ居られむ、雀ども
集まりて、食ひよ来られむ、又、うちくしけんむ、三
つ、おち折りぬ。今も、かゝりありて、ありなんと思
ひて、こゝ折りしる雀、三斗桶より入れ、銅こ
そげて、くもせなご志て、月頃経る程よ、みまよく

成りよこれだ、悦びて、外に取らぬでこれだ、やうくと
と飛びて、みないぬ。いみじきことぞ志つと思ふ。雀
も、こゝち折られて、かく月頃籠め置きしを、
よよ、ねごとと思ひけり。さて、十日許り有りて、こ
の雀ども来されを、悦びて、先づ口よ物やらせし
しと見らるゝ、瓢の種子を、一つづつ、みなおと
ていぬ。されどよと、嬉しくて、取りて、三所よ植ゑ
てけり。例よりも、すくくと、生ひしとて、いみじく
大ききよなりしなり。これを、いと多くもなすべし、七八
ぞなりしなり。女、あみまけて見て、子どもよいふや

我れもの下よく
いとよ語あり
下、食せんと

ら、そろぐしき事、志出でずといひしなりと、我れを、
隣の女も、まさりなんといふを、けよ、さもあり
たんと思ひしなり。これを、数の少なけれど、米多
とらんとして、人ももろくせず、我れもくもせず。子ど
もが、いふや、隣の女房も、里隣の、人ももくもせ、
我れも、くひまどをせしなり。これを、まゝして、三つ
が種子なり。我れも、人ももくもせらるべきなり
といふを、さうと思ひて、近き隣の、人ももくもせ、
我れも、子共も、諸ともよ食をせんとて、おほら
かよて食ふよ、はぐきこと、物もも似ず。きこふな

おんをす。

どのやうもて、はらまどふ。食いと食ひさる、人々も、子ども、それも、物をつきて、まどふ程は、隣の人ども、みな、心ちをそんで、来集まりて、こも、いふもの物を、くもせつるぞ。あな怖し、露討り、けふんの、口よよりさるものも、ものをつきまどひあひて、死ぬべくこそあれと、腹立ちて、いひせうめんと思ひて来られぬ。の、女をそんでめて、子共も、みな、物おぼえず、つき散らして、いせりあひさう。いふあひなく、ともみ帰りぬ。二三日も過ぎぬれど、たれくも、心ちなほりみさう。女思ふ

けふんて、外物よて、口よよりさるもの、いせりあひさう。

やう、みな、米よさうんと志ける物を、急ぎて食ひふれむ、かく、あやうりけるなありと思ひて、残りをも、みをつりつけて置きさう。さて、月ごら経て、今を、よくなうぬらんとて、移し入られさうの、桶どもぐりて、部屋入り、嬉しければ、齒もなき口して、耳のものとまで、ひとり志みして、桶をよせて、移しければ、蛇、蜂、百足虫、とかげ、くもを、など出で、目鼻ともいそぎ、ひと身よ取りつきて、させども、女痛きもおぼえず、たぐ米の、らぼれか、るぞと思ひて、志さう。待ら給へ、雀よ、すさうづ、

ひと身よ、全身よ、こゝろ、意、このひこそ、ひと、このひこそ、あな、

どろんといふ。七八の瓢より、そとらの毒虫ども
出で、子どもをもさしひ女をむさし殺して
けり。雀の、こーをおち折られて、ねさしと思ひて、
よろづの虫どもをかさしひて、入れさしけるな
り。隣の雀も、もと、さし折れて、鳥の命とりぬべ
り。を、やしひつけられ、嬉しと思ひけるな
り。されど、物羨み、すまじき事なり。

播磨守為家の侍佐多の事

今もむら、播磨守為家といふ人あり。それが内
よさせる事もなき侍あり。あざな、さごととん

呼びけるの下よ
そがなとつ、接
續詞のあつべき
かり。
すまよ、收納の
字音よ、租税の
どり初れなどの
こと。

ひけるを、例の名をを呼ばずして、主も、傍輩も、唯
どさごとのみ呼びける。さしける事をなけれど
も、まめよつうもれて、年比よなりよけれど、あや
しの郡の、すまよなどせさせけれど、悦びて、其郡
よ行き、郡司の、もとよ宿りよけり。なすべきも
の、沙汰などいひさごとして、四五日ごかりあり
て、のぼりぬ。その郡司がもとよ、京よりうかれて、
人よ、すまよされて来りける、女房のありけるを、
いとあうかりて、養ひおきて、もの縫をせなど
つうひけれど、さやうの事を、心えて志けれ

む、あそれたるものよ、思ひて、おきこりけるを、このさごよ、従者がいふやう、郡司が家よ、京の女などいふもの、かゝるやうく、髪長きがさごいふを隠す急で、殿もあうせ奉らうで、おきこてさあらふぞと、語りければ、ねえき事を、日男かゝとよありし時を、いそいで、かゝいふを、憎き事なりと、いひければ、そのおとまゝかゝるらよ、きりかけの侍りしを、隔て、それが、あなよ、さごらひらうを、あうせ給ひらうと、さご、思ひ給へらうと、いふを、此度も、あうせ、いふと、思

ひつるを、いそま申して、とく行きて、その女房かならうせんといひけり。さて二三日がかりありて、為家よ、さごすべき事共のさごらひしを、さごしきして、参りて、さごらひしなり。いとま給をりて、まうらんといひければ、事をさごしきして、何せんよのぼりけるぞ、とく、わけかゝといひければ、悦びてくごりけり。行きつきけるまゝよ、さかくの事もいそぎ。もとより、みおれなどあうらんとよて、さごらうと、かゝん程も、さやあうべき。従者などよせんやうよ、着らりける、水干のあやいげな

りけるがほろろび絶えたるを切りかけのうへ
よりちげこゝて、高やうよ、これがほろろび、縫ひ
ておろせよと、しひけれを、ほどもなく、ちげ返し
うりけれを、物ぬもせ、事さすと聞くが、げよ、とく
縫ひて、おろせよと、女人おまよと、あううなる聲
して、ほめて、どりて見るよ、ほろろびも縫ひて、み
ちのくらに紙の文を、そのほろろびのもとよ、結び
つけて、ちげ返し、うなるけり。あやーと思ひて
ひろげて見れを、かくかきこり。

それが身を、竹のさやーよ、あうねども、せご

見よよえ見つけ
ずして見らる事
さへも、生来す
ての意なり。

が衣をぬきかゝるうなよ、とかきこるを見て、あを
れなりと思ひ、あうん事こそ、かううめ。見るま
よ、大きよ、腹をまき、目つづれたる女人おまよ、ほ
ろろび、縫ひよやり、これぞ、ほろろびの絶えたる
所を、見よよえ見つけずして、さごののところ、い
ふべきよ、かけまきよ、かゝるき、守殿ごよも、まご
ころころの年月比、まごうめさうね。なご、女
が、さごごと、いふべきころ。この女人よ、物をう
らまんとつひて、よよ、あまま、き所をさへ、何せ
んかせんと、のりのらひけれを、女房を、物もおほ

えざしそ泣きけり。腹立ちちりて、郡司をさく
のりて、いで、これ申して、事はあをせんといひけ
れた郡司も、よなき人を、あをれぬおきて、その
とくよも、そそも、勘當、かうぶるよこそあをれと、
いひけれぬかご、女おそろしう、さびしく思ひ
けり。かく、腹立ちちりて、帰りのぼりて、さぶらひ
よて、やすかうぬ事こそあれ。物もおほえぬこと
り女よ、かきしういそれるる、かうの殿よ、さぶ
とこそめせ。この女め、さぶごとといふ、さぶさや
もと、唯、腹立ちよ腹ごそ、聞く人共、え心得ぞ

いそれるの下
よそよ、文字を
あぶ。

りけり。さそも、いふなる事をせられて、かくまの
ふぞと聞へぬ、聞き給へよ申さん。かやうの事を、
たれも、同ド心よ、守殿も申し給へ、君たちの名
ごそよも、ありといひて、ありのままの、事をかこ
りけれぬ、さそくといひて、笑ふものもあり。憎ら
るものも多うり。女を、みまいとほり、かり、やさ
しかりけり。この事を、為家聞きて、前よ呼びて、聞
ひけれぬ、我がうれく、さうよと悦びて、ことごと
く、のびあがりて、いひけれぬ、よく聞きて、後、其
男を、追ひ出づりてけり。女を、いとほり、かり

て、物とらせなごしけり。心うら、身を共ひける男
とらご。

三條中納言水飯の事

今をむらし、三條中納言といふ人ありけり。三條
右大臣の御子なり。才かごとくてもろごとしの事
此世の事、みな志り給へり。ららるるをくかごとく
きもふとく、おしかりごとくてもろに在りける。笙の
笛をなんきとめて、吹き給ひける。長け高く、大き
よふとりになん在りける。ふとりのあまうり、せめ
て苦きまで、肥え給ひければ、薬師重秀を呼び

いづせんといふ
引の下まを文
字あるべし。さ
もかゝる所のぞ
も省けらもあれ
ども、総て斯く同
ひかけの所まで
も、文字をかく
かゝ意だうよ
聞ゆべし。

て、かく、いみじうふとるを、いづせんとする
まら居なごするが、身の重く、いみじう苦きな
りと、宣へむ、重秀申すやう、冬も湯づけ、夏も水づ
けよて、物をめすべきなりと申しけり。そのま
よめしければ、唯、同じやうも、肥えふとり給ひ
けれど、せんうとなく、又、重秀をめて、いひ
まよすれど、その志も、水飯食ひて見
せんと、宣ひて、男どもめすよ、さぶらひ一人、冬
されど、例のやうも、水飯して、もてこといふれけ
れむ、志も、なうりありて、御臺もて参るを見れ

だ、御臺、かゞぐよそひもて来て、御まへよすゑら。
御臺よ、箸の、だいでうりすゑら。つゞきて、御盤
さしげて参る。御まうなひの臺よ、すうるを見れ
む、御盤よ、白き干瓜、三寸ざうりよ切りて、十ざう
りもりこり。又、すーあゆの、おせくくよ、廣ううな
るが、あがりかーうざうり押ーて、廿ざうりもりこ
り。大きなる、金鞠をぐーこり。みな、御臺よすゑら
り。今一人の侍、大きなる、銀の提よ、銀のかひをた
て、重げよ、もて参りこり。金鞠を給ひくれむ、か
ひよ、御物をすくひつゝ、高やうよもりあげて、そ

おせくくよお
ひしめくよやう
なをいぬ

ぞよ、水をすくー入れて、参りせこり。殿臺をひき
よせ給ひて、かたまりを取し給へるよ、さざら
り、大きなおろする、殿の御手よ、大きなる、かたまり
りかなと見ゆる、けーうをあゆぬ、ほどなるべし。
干瓜三きり斗くひきりて、五六ざうり参りぬ。次
よ、鮎を、二きりざうりよ、食ひ切りて、五六ざうり
やすうらよ参りぬ。次よ、水飯を引きよせて、二た
びざうり、箸を廻し給ふと、見る程よ、おももの、みな
うせぬ。又とて、さし給をす。さて、二三度よ、ひさげ
の物、みなよなれむ、又提よ入れてもて参る。重秀

このぢやうよの
ぢやうよ定の字
音よて此やうよ
の意をう。

これを見て、水飯をやくとめすとも、このぢやう
よめを、更よ、淨ふとり、なほるべきよあらずと
て、逃げていたけり。されど、いよく、相撲などのや
うよてぞ、おそしける。

下野武正、大風雨日、参法性寺事、

是も、今をむく、下野武正といふ舎人も、法性寺
殿よ候ひけり。あるをり、大風大雨降りて、京中の
家、みな、なほれやぶれけるよ、殿下、近衛殿よおそ
しましけるよ、南面の方よの、しるもの、聲志
けり。誰なるんとおぼしめて、見せ給ふよ、武正

けつてけるのあ
やまうなるべし。

ありかうのかみ志もよ、蓑笠を着て、蓑の、くよ、
繩を帯よして、檜笠の、うくを、又、おとがひよ、繩よ
てか、うげつけて、かせ杖をつきて、走り廻りて、お
こなふなりけり。たう、そのすぐ、おひ、し
く、似るべき物なり。殿南におもてへおど、御廉よ
り御覽するよ、あさましくおぼしめて、御馬な
んよびけり。

歌よみて、被免罪事、

今をむく、大隅守なる人、國の政を、志し、めお
こなひ給ふあひど、郡司の志を、げなうりければ、

召しよやりて、いましめんといひて、先々の様よ、
志どけなきことありけるよを、罪よまかせて、重
く、軽く、いましむる事ありけれど、一度よあらず、
度々志どけなきことあれど、重くいましめんとい
て、めすなりけり。こよ召して、ゐて参りしうと、
人の申しけれど、さきぐすすやうよ、志よせて、志
り、かいらみのほり居る人、志よとをまうけて、
おつづき人まうけて、さきよ人、ふうりひきさり
て、出で来しうを見れど、頭を、黒髪もまじらず、い
と白く、年老いしう見らよ、おせんこと、いとほ

老をかうげを老
をかげしうしう。

しくおぼえけれど、何事よつけてう、これを、ゆる
さんと思ふよ事つづきことなり。あやまちと
もを、かきしうより問ふたご、老をかうけよと、
いしうをる。いつたしう、これを、ゆるさんと思ひて、
己れを、いみじき盗人かを、歌えよみせんやとい
へむ、をかぐしうかうず候へども、よみ候ひなんと
申しけれど、さらだ、つかまつれといをれて、程も
なく、よまなき聲よて、うらやみず。

年を経て、かいらの雪も、積れども、志よとみ
るよを、身をひえよけらと、いひけれど、いみじう

あそれがりて、感^どてゆる^くけり。人も、い^ふにも、
なま^けもある^べ。

あを^つねの事、

今をむ^ろ、村上の御時、古き宮の御子よ、左京
大夫なる人、お^もけり。長けす^くほ^ろた^らよ、
い^みど^くあ^でや^うなる姿を、志^すれとも、やう^ぶ
いた^ども、を^こなりけり。か^くた^らき^様ぞ志^す
りけり。頭の、あ^みか^らなりけれむ、えい^と
せ^なら^みもつ^つす、を^なれてぞ^ふれ^ける。色を、
を^なを、ぬ^りら^やうよ、あ^をを^らよ、ま^うが^ら

ま^んぶ^らも^今ま^ぶ
ぶ^ら。

け^らえ^けり^とあ^ら
ら^べ。

く^ぼく、を^なの、あ^をや^うよ高^くあ^らら^びる
薄^くて、色も^なく、志^めを、歯^から^なるもの、歯^肉
あ^らく^て、ひ^げも、赤^くて、長^うり^けり。聲^をを^なを^こ
志^よて、高^くて、物^のこ^も、一^うち^らひ^びきて、聞^えけ^る
る。あ^ゆめ^が、身^をを^ふり、肩^をを^ふりてぞ、あ^りき^ける。
色^の、せ^めて、あ^をを^かり^けれ^む、あ^をを^つね^の君^とぞ、
殿^上の君^達を^つけて、笑^ひける。若^き人^たら^の、た^ら
ち^らよ^つけて、や^すう^らず、笑^ひの^こり^けれ^む、
み^らぶ、聞^える^べ、あ^まり^て、こ^のを^なを^こも^の
これ^をか^く笑^み、び^んを^き事^{なり}。父^の御^子聞^き

て、せのせすとも、我を恨みざらんや、なごおほせ
られて、まあやうよきのなみ給へど、殿上の人々、
志々なきをして、みな笑ふまじきよし、いひあへ
りけり。さて、いひあへるやう、かく、さのなめを、今
より、長く起請す。もし、かく起請して後、あをつね
の君と呼びこらんものを、酒くぐ物など、取り
出させて、あがひせんと、いひうさめて、起請し
て後、いづれもなきて、堀河殿の殿上人よりお
こしけるが、あうなく立ちてゆき、うしろ手を見
て、忘れて、あのをうつねまるも、いづら行くぞと

あがひせあがな
ひといふよおな
い。

ゆきと、ゆきと
あ。

宣ひてけり。殿上人ども、かく、起請を破りつるも、
いとびんなきことなりとて、いひ定めさるやう
よ、すみやうよ、酒くぐ物、とりよやりて、この事あ
かくと、集りて、せあのいりければ、あがひて、
せじとすまひけれど、まあやうよく、せあけれど、
さうぞ、あさてなうり、あをつねの君あがひせん、
殿上人、藏人、其日、集まり給へといひて、出で給ひ
ぬ。其日よなりて、堀河中将殿の、あをつねの君の
あがひすべしとて、参らぬ人な。殿上人、居並び
て待ら程よ、堀河中将、直衣姿よと、かちちち、光る

やうなる人の、香も、えもいも、かずかうむしく、愛敬
こぼれよこぼれて、冬り給へり。直衣の、長やうよ
めで、きき裾より、青きおちこる、ゆざう、袖して、指
貫も、青色の指貫を着けり。隨身三人よ、青き狩衣
袴着せて、ひとりよも、青くつらぐりこる、をき
よ、青地の、四よ、こくもを、もりて、さげり。いま
一人も、竹の枝よ、山鳩を、四五むりつけ、もた
せり。又ひとりよも、青地のかめよ、酒を入れて、
青きうすやうよ、口を、色みこり。殿上の前よ、も
ちつぎきて、ゆで、くれを、殿上人ども見て、もろご

ひよ青と総て青
きをいふ此ひよ
て、ひと身ひよと
と等の、ひとと回
語の轉聲なり。

志よ、笑ひこもむこくおびたぐり。御門聞らせ給
ひて、何事ぞ、殿上よ、おひこく、聞こゆるも、と、
とせ給へど、女房、兼道が、青つね呼びて、さぶら
へむ、其事よ、よりて、男子どもよ、せめられて、其罪
あがひ候ふを、笑ひ候ふなりと申しければ、いつ
やうよ、あがふぞとて、ひのおま、よ、ゆで、させ給
ひて、小部より、のぞうせ給ひければ、我れより、と
ためて、ひよ、青なる装束よ、て、青きうひ物どもを、
もつせて、あがひければ、これを、笑ふなりけりと、
御覽下て、え腹たぐせ給へど、いみどう、笑を、せ給

ひけり。其後を、まめやうよ、さのちむ人もなうり
けれむ、いふくなん、笑ひあざけりける。

河内守頼信、平忠恒をせむる事、

むう、河内守頼信、上野守よてあり、時、坂東よ
平忠恒といふ兵ありき。仰せしむる事、なまごう如
くよする、討せんとして、多くの軍おこして、かれが
すみうの方へ、行きむうよよ、入海の、遙うよさ
りうらるむうひよ、家を作りて居り。この入海
を、まをる物を、七八日よめぐるべし。すぶよ
渡らむ、其日の中よ、せあつべけれむ、忠恒渡りの

なまごう如くよま、
歳うよよおをり。
まうするの、下よ
を、の字を略
しう。

どうかく、うら
の下よしむの字
を略しう。
いふよすすべき
の下よしむの字
を略しう。

舟どもをみなとりかくしてけり。されむ、渡るべ
きやうもな。濱を、おちまうて、この濱のま
よめぐる、つきよこそあれと、兵ども、思ひうらよ、
上野守のいふやう、この海のまよ、思ひてよせ
む、日比へなん、其間よ逃げも、ま、寄られぬか
ま、くもせられなん。今日のうらよよ、せてせめん
らそ、あのやつも存外よ、そあるて、ま、とらんず
れ。志うらよ、舟どもも、みなとりかくしうら、い
も、すぶきと、軍どもよ、とられけるよ、軍ども、更よ
渡ら給ふべきやうな。廻うてこそ、よせさせ給

ふべく候ふと申しければ、此軍どもの中よ、さりと
も、この道、知りしものもあるらん。頼信を坂
東方を、此度こそを、めてみれ。されども、我家の
つゝくもて、聞きおきし事あり。この海の中よ
と堤のやうもて、廣き、一丈をうりしと、すぐよ渡
りし道あるなり。深きを馬の、ふとむらよたつ
と聞く。この程よこそ、其道を、あつりたるらめ。さ
りとも、この、多くの軍どもの中よ、知りしものあ
るらん。さらば、さきよ立ちて渡せ。頼信、つゞきて
渡さんとて、馬をかきとやめてよりければ、知り

三人がうりも、三
人てうりぞとま
くして、いづれを
調へず。

しものみやありけん、四五騎をうり、馬を、海よ
おちたらしめて、たゞ、渡りよ渡りければ、それよつき
て、五六百騎許りの軍共、渡りけり。まことに、馬の
ふと腹よ立ちて、渡る。多くの兵共の中よ、たゞ、三
人をうり、その道も、知りしものあり。残りも、つゆ
も知らざりけり。聞く事よも、なうりけり。然る
よ、この守殿、此國を、これこそを、めて、おそ
するよ、我れよも、これの、重代の、ものどもよ、あ
るよ、聞きしものも、せず、あらぬよ、かく、あり給へる
まげよ、人よ、すぐれし兵の道か、なと、みな、さく

やきおちて、渡り給ふほど、忠恒も海をまもり
てぞよせ給はんずらん舟もみを取りかゝり
れむ、あさみちをむ我れをうりこそ志りされず
ぐももえ渡り給もど、濱をまもり給はん間も
どかくもし、逃げも志てん、さうをくも、えせめ給
もどと思ひて、心志づりよ、軍揃くて居るよ、家
のめぐりなる郎等、あつて、走り来ていそぐ、上野
殿も、この海の中、浅きみちの候ひけるより、多
くの軍を引き興して、すでよこしく、来給ひぬ。い
うせよせ給はん、と、目をさしき聲よ、あつてい

ひけれを、忠恒かぬての、志づくよ、違ひて、我れす
でよせめ、れあんずかやうよ、志てたてまつ
らんと云ひて、たちまちよ、みやうぶをかきて、ふ
みもさみよはさみて、さうよ、上げて、小船よ、郎等一
人乗せて、もせせて、迎へて参らせりけれを、守
殿見て、彼のみやうぶを、うけとらせして、いそぐ、か
やうよ、みやうぶよ、をさうり、ぶみをそへて、いぶ
すすでよき、されるなり。されむ、あながちよ、せむ
ぶきよ、あらずとて、この文をとりて、馬を引きか
へしけれを、軍共、みを帰りけり。其後より、いそぐ

守殿をむ、ことよすがれて、いみじき人よおと
ますと、いみじくもれ給ひけり。

白川法皇北面受領下りのまねの事、

これも今をむく、白川法皇、鳥羽殿におも
しける時、北面のものども、受領の國へ下ら
まねせさせ、御覽あるべしとて、玄蕃頭久孝と
いふものを、衣冠よきぬいづて、其外の
五位どもを、前驅せさせ、衛府どもを、やまぐ
ひおひよして、御覽あるべしとて、おのく、錦唐綾
をきて、おとらと志ける、左衛門尉源行遠、心

なりては、何れも、
國司よきてな
るべし。かゝる所
よ、ま格かくれて
も、文意暗くなら
ず。

定の意、いづれも、
らふ。あるは、條の
字、その意、い
よも、やあ、ん、ぎ
ら、む、上、の、さ、う、ら
も、さ、う、ら、う、て、時
なりて、も、午、未、云
々の意、よ、も、や、あ
らん。

ことよ、おで、立ちて、人よ、かねて、見えなむ、目なれ
ぬ、べしとて、御前、道よりける、人の、家よ、入り、おて、
従者を呼びて、やうれ、御前の邊まで、見て、こと云
て、参らせ、てけり。むご、見え、ざり、けれむ、い、う、に、
かう、も、遅き、より、と、た、ら、の、時、と、こ、そ、も、よ、ほ、し、を
あり、し、う、さ、う、ら、う、と、い、ふ、定、午、未、の、時、よ、も、渡、ら、ん
ず、らん、もの、を、と、思、ひ、て、待、ち、る、ら、ん、よ、門、の、方、よ
聲、し、て、あ、そ、れ、ゆ、い、かり、つ、る、もの、か、た、く、と、い
へ、ども、た、い、参、る、もの、を、い、わ、ら、ん、と、思、ふ、ほ、ど、よ、
玄、番、殿、の、國、司、姿、ら、そ、お、か、し、う、り、つ、れ、と、い、ふ、藤

左衛門殿も、錦を着給ひつ源兵衛殿も、ぬひ物を
して、金の文をつけて、なごかざる。あやうおほ
えて、やうれと呼ぶ。此見てこととやりつる男
あみて、ゆで来て、大方、おむりの見物候をす。か
も祭も、物もても候をす。院の御機敷の方へ、渡
あひ給ひつりつるさまを、目も及びさづらもす
といふ。さて、いうにといへを、早うもて候ひぬと
いふ。こそ、いうに、来てを告げぬぞといへを、こそ、
いうあることとようさづららん。参りて、見てこ
とおほせさづらへを、目も、たうらざよく見て、さ

ぶらふぞかといふ。大方、どかくいふざうりな
し。さうほども、行遠を、進奉、不参、返す、奇恠なり。
た、かみ、め、こめよと、仰せらざされて、廿日あ
まり、候ひける程も、この、志、ごいを、聞、め、て、笑
ませお、ま、て、ごめ、こめを、ゆりて、ける、と、う。

樵夫小童、隠題歌讀事、

今をむら、か、く、題を、い、み、く、興せ、させ、給ひ
ける、御門の、ひ、ち、り、き、を、よ、ま、せ、ら、れ、け、る、よ、人、々、
り、ろ、く、よ、み、う、け、る、よ、木、ら、る、童の、あ、う、つ、き、山
へ、行、く、と、て、い、ひ、け、る。この、は、ひ、ち、り、き、を、よ、ま、せ

いひけるの、下、ま
と、給、せ、ざ、ん、な、ら、う

の下よむむ文字
のあふぶきを略
せりやう。まご給
たまふんを給まご
るを音便よひく
るやう。

させ給ふなるを、人のえよみ給もざんなる。童こ
そよみされと、いひければ、俱して行く童申す、あ
なおほけな、かゝることないひそ。さまよも似ず
いま〜といひければ、なごり必ずさまよ似る
ことかとして、

つひさうけの
下よむむ文字を
略せり。

めぐりくるもあ〜ごとよさ〜らなを、い
たびちりき、人よとと〜やといひ〜りけるさま
よも似ず、思ひかけずぞ、

高忠侍、歌讀事、
今をむ〜、高忠といひける、越前守の時よ、いみ

どく、不幸なりける侍の、夜晝まめなるが、冬なれ
ど、か〜びらをまん着〜りける。雪の、いみどくふ
る日、侍歌よめ、お〜降る雪かたと、い〜を、こ
のさ〜らひ、何を題して、仕つるべきぞと申せば、
ち〜なるよ〜を、よめといふよ、程もなく、ふる
ふ聲をさ〜げて、よみあぐ、

ち〜なるよ、まが身よか〜る、白雪を、うらな
らくども、きこえせざりけり、とよみければ、かみい
みどくほめて、着〜りける衣をぬぎて、と〜す。北
の方も、あをれかりて、薄色の衣の、いみど〜うか〜

むききをしきせしりけれど、こつちをがらとりて、
かひりもみみて、つしきよをさみて、立ちさうりぬ。侍よ
行きつれむ、居並みする侍ども、見て、驚きあや
かりて、問ひけるよ、おくと聞きて、あさましかり
けり。さてこの侍、その後、見えざりけれど、あや
かりて、かみ尋ねさせけれど、北山よ、尊き聖あり
けり。そこへ行きて、この得たる衣を、こつちをがら
とせして、いひけるやう年、まかり老いぬる身の
不幸、とておいてまゐる、この生の事、やくもな
き身よ、候ふめり。後生をよ、いふでうおぼえて

成りよけり
とけり
ふびき所なり

法師よまうりなると、思ひ侍れど、戒の師よ奉
るべき物の候もねむ、今よすぐし候ひつるよ、か
く、思ひがけぬものを給ひつれど、かぎりなく、嬉
しく思ひ給ひて、これを、布施よ参らするなりと
て、法師よなまさせ給くと、涙よむせかへりてなま
いひけれど、聖いみじうたよとがりて、法師よな
しとけり。さて、そこより行く方もなく、うせよ
けり。あり所も知らず成りよけるといふ、

鄭大尉事

今をむろ、親よ孝するものありけり。朝夕よ、木

をこりて、親をやしをふ孝養の心、空よ知られぬ。
かぢもなき、船よ乗りて、向ひの島よ行くよ、朝よ
を、南の風吹きて、北の島よ、吹き着けつ。夕よをま
よ、舟よ、本をこりて、入れてゐるれを、北の風吹き
て、家よ吹きつけつ。かくの如くするほどよ、年比
よなりて、お屋やけよ、きこりて、めりて、大臣よな
て、めりつる。其者を鄭大尉とぞいひける。

元輔、落馬の事、

今をむろ、歌よみの元輔、くらのすけよ、成りて、
かも祭の使ひ志けるよ、一条大路、くろりけるほ

どよ、殿上人の、車多く並ぶたて、物見ける前、渡
る程よ、おのろろもて、渡りて、人見給ふよと思
ひて、馬を、いこりありけれを、馬くろひて、落ち
ぬ。年老いこるもの、頭をさうさまよて、落ちぬ。
公達、あな、いみどと見る程よ、いと、とく起きぬれ
む、かぶりぬげよ、けりもこりつゆなき。たゞ、ほ
とぎを、かづきこるやうよ、そなんありける。馬ぞ
ひ、手まどひを、かづりをこりて、きせさすれ
ど、ららさまよ、かきて、あな、騒ぐ、志を、まて、
公達よ、聞こゆべき事ありとて、殿上人、ごもの、車

の前よあゆみよる。目のさ〜るよ、頭き〜るとして、いみどう見苦し。大路のもの、市をなして、笑ひの〜るよ、おぎりなり。車さ〜きのものども、笑ひの〜るよ、一つの車のか〜まよ、あゆみよりて、いあやう、公達、この馬より落ちて、おぶりお〜るをむ、をとなりとや思ひ給ふ。志ろ思ひ給ふまじ。其故も、心をせある人ごよも、物よつまづきたる〜事を、常の事をなり。まして馬を、心あるものよあ〜ず。この大路を、いみ〜う、石高し。馬を、口をらり〜れを、あゆまんと思ふごよ、あ

ゆまれず。とひきかひ引き、くるめうせを、たふれんとす。馬を、あ〜と、思ふべきよあ〜ず。から鞍をさらなり。あぶみの、かくう〜もあ〜ず。それよ、馬を、い〜つまづけむ、おらぬ。それよ、ら〜ず。まさ、かぶりの、落つる事を、物〜と、いふものよあ〜らず。かみを、よくかき入れ〜るよ、さ〜く〜るよ、ものなり。それよ、びんを、うせよ〜れを、ひ〜ぶるよ。な〜。それを、落ちん事、かぶりうらむ、べきやうな〜。又、例なきよあ〜ず。何のお〜も、大嘗會の御禊よ、おつ。何の中納言を、其時の行幸よおつ。かく

の如くの例も、かんぐへやるべからず。あうれを案
内も知り給えぬ此頃の、若き君達、笑ひ給ふべき
よあらず。笑ひ給えぬをこなるべしとて、車ごと
よ手を折りつゝ、數へて、いひ聞かす。かくの如く、い
ひをて、かぶりもてこといひてなん、こりてさ
入れける。其時よ、とらみて、笑ひのこる事、かざ
りなり。かぶりせさすとして、よりて、馬さひのいそ
く、落ち給ふすなをもち、かぶりを奉らで、ちど、かく
よ一なる事を、仰せらるゝぞと、いひければ、忘れ
ごとないひそ、かく、道理を、いひきうせらるゝを、こ

そ此の違を、後々よも、笑をさうめ。さうすた、ち
さぐちなき君達を、ながく、笑ひなんものをやとぞ
いひける。人笑をすること、やくよするなりけり。

亀を買ふて、ちをさす事、

むろ、天竺の人、たうらをかろんため、錢五十
貫を子よ持てせてやる。大きなる河のちをを行
くよ、舟よ乗りしる人あり。舟のかをを見やれを
舟より、亀、くびをさし、ゆごしうら。錢持ちしる人
ちちとまりて、この亀を、何のれうぞと、人、を
ころして、物よせんずるといふ。其龜、かるとい

せんすません
とすの物まり

つらき。

へむ、この舟の人つらき、つみどきたのせつ之事
ありて、まうけつる龜をれむ、つみどきあふひな
り共うらまじきよーをいへむ、あながちよ
手をすりて、この五十貫の錢もて、龜を買ひとり
て、をなちつ。心よ思ふやう、親のたうら買ひよと
ぢりの國へ、やりつる錢を、龜よかへて、やみぬれ
む、親、いふにちらぶち給せんすらむ。さりとて、ま
よ、おやのものへ、いふであるべきよあふぬを、親
のちとく帰り行くよ、道よ人あひていふやうこそ
よ、龜うりつる人を、この志もの渡りよて、舟うち

来りつるの
つらき文字を略
しり。

かへして、死にぬとなんか、つらきを聞きて、親の家
よ帰りゆきて、錢を、龜よかへつるよーか、つらん
と思ふほどよ、親のいふやう、何とて、此錢をむか
へーおとせつるぞと問へむ、子のいふ、さることな
し。其錢もて、志らぐ、龜よかへて、ゆらーつれを、そ
のよーを申しんとて、冬りつるちりとのんむ、親
のいふやう、黒き衣きつる人、おなごやうなるが、
五人、おのく、十貫づ、持ちて来りつる、これ、そ
ちりとして、見せけれむ、この錢、いまどぬれを、ら
あり。そや、かひて、をなちつる龜の、其錢、河よ、落ち

入るを見て、とり持ちて、親のもとよ、子の帰らぬ
さまよやりけるなり。

大井光遠妹、強力の事、

今をむうし、甲斐國の相撲、大井光遠も、ひざふと
よのうめしく、力強く、足をやく、みめことがりよ
り、をどめて、つみどりしく、相撲なり。それが妹よ、
年廿六七をうりなる女の、みめことがり、けをひ
もよく、すぐさも、細やうなるありけり。それをも、
きこふる家よ、ほみけるよ、それが門よ、人よ、おそれ
くる男の、刀をぬきて、きり入りて、この女を、志ち

よどりて、腹よ、刀をさし、あそく居ぬ。人走り行き
て、せうとの光遠よ、姫君も、質よ、とられ、鈴ひぬと、
つげられ、光遠が、いふやう、そのおもとを、薩摩
の、氏長を、うりこそ、質よ、とらめといひて、何と
なく、居られ、告げつるを、のこあやしと思ひ
て、まぢり歸りて、物よりのぞけを、九月をうりの事
なれを、薄色の衣一重よ、紅葉の袴をきて、口おほ
ひして、居らる。男も、大きなるを、めこの、おそろ
げなるが、大の刀を、さかてよどりて、腹よ、さし、あ
そく、足をもて、うらより抱きて居らる。この姫

君、左の手―そも、顔をふさぎてなく。右の手―そ
と前み、矢筈の、あつらつり―つるが、二三十むり、
あるをとりて、手すきみよ節のをもとを、指よて、板
敷み押―あそく、にどれを、朽木の、やを―らうなる
を、押―くごくやうみくごころを、この盗人、目を
つけて、見るよ、あさましくなりぬ。いみじうらん
せうとのぬ―うな、槌をもちて、おち砕くとも、か
くそあつとゆ―かりける、力のな、このやうよ
ても、たゞ今の回み、それをも、とりくごうれぬべし、
無益なり、逃げなんと思ひて、人目を―らうりて、と

びおで、逃げ走る時よ、人ども、走りあひて、どら
へつ。志を―りて、光遠がもとへ、傷―て行きぬ。光遠、
いつに思ひて、逃げつるぞと、問へど、申すやう大
きなる、矢筈の節を、朽木なんどのやうよ、押―く
ごき、給ひつるを、あさましくと思ひて、おそく―さ
よ、逃げ候ひつるなりと申せど、光遠、おち笑ひて、
いつなりとも、その御もとを、よもつうれど。つら
んとせん、手をとりて、かゝぬぢて、かみさまへつ
うむ、肩の骨を、かみさまへおで、おちられなま
し、か―く、おのれが、かひを、ぬうれま―宿世あ

りて御もとをねぢざりけるなり。光遠ごよもお
のれをたてらるゝみ、ころろ〜ん、かひなをむぬ
ぢて、腹胸をふまんよ、これを、いきこんやそれよ、
かの、清むとの力を、光遠二人をうりあをせらる
かめて、おをする物を、さこそ、細やうよ、女めう〜
くおをすれども、光遠が、手たをぶれするよ、とら
へ〜うでをさう〜られぬれを、手ひろ〜りて、
ゆる〜つべき物を、あそれをも〜よめてあ〜ま
〜うを、あふか〜き、なくてぞあ〜ま〜。口惜〜く、
女よであるといふを、聞くよ、この盗人、志ぬべき

あつの下よ、あ
なごい語のあ

る〜を略〜
り。
〜の下よ、あ
な〜を略〜
〜。

〜らす。女と思ひて、い〜き質を〜ら〜と
思ひて、あれども、その儀もな〜。おのれをむ、ころ
すべけれども、清むとの志ぬ〜む、こ〜らさ
め、おれ志ぬ〜りけるよ、か〜らう、と〜、ゆ〜げて
のき〜らよ。大きな鹿の角を、膝よあ〜、ちひ
さきから木の細き〜んを、折るやうよ、折る物
をとと、追ひ放らて、やりけり。

經頼、蛇よ逢ふ事、

む〜、經頼といひける相撲の家のか〜らよ
〜河のありけるが、深き、淵なる所ありけるよ、

夏その川近く、おうげのありけれむ、かゞびらむ
かり着て、中ゆひて、あゝぶをきて、まゝふり杖と
いふものつきて、小童ひとり、ともよ俣して、どか
くありきけるが、すぐまんとて、其淵の、かゞしら
の、おうげよ居よけり。淵青く、おそろしげよて、そ
こもみえぬ、蘆薦をどいふもの、おひ志げり、けり
けるを見て、汀近く、まゝけりけるよ、あなこの岸を
六七だんごうりも、のきこるらんと見ゆるよ、水
の漲りて、こちよこまよ、来けれむ、何のするよ、
あゝんと思ふ程よ、この方の、汀近くなりて、蛇の

頭を、さゝかで、けりけれむ、このくらをた、大なる
んう。とまよよのぼらんとするよ、やと見よて
りける程よ、蛇頭を、おうげて、つらぐとまもりけ
り。いうた、思ふよ、あゝんと思ひて、汀、一尺むら
りのきて、まゝ近くまらて、見けれむ、志を、まら
り、まもりく、て、頭を、引き入れてけり。さて、あなこ
の岸、まよよ、水漲ると見ける程よ、まゝこを、こざ
まよ、水浪まらて、のち、くらを、その尾を、汀より、さ
しあげて、まゝまらて、方まよよ、さゝしせけれむ、
この蛇、思ふやうの、あるよ、こそとて、まらせて、見

まそりけれを、なほさしよせて、経頼が足を、三四
返さうり、まといひけり。いうたせんずるようあらん
と、思ひて、まそる程よ、まといえて、きくくと引き
けれを、河よ、引き入れんとするよこそ、ありけれ
と、その折りよ知りて、ふみつよりて、まそりけれ
を、ひみじう強く、ひくと思ふ程よ、ちきこるあ
ごのちを、ふみをうつ。ひきたあされぬべきをか
まへて、ふみなほりて、まそれを強く引くとも、た
ろちなり。引きとられぬべく、おぼゆるを、足を、つ
よくふみまて、けれを、おろちらみ、五六寸さうり

足をふみ入れて、まそりけり。よく引くなりと思
ふほどよ、縄などの切るやうよ、切ると、まゝよ、水
中よ、血のさつと、ちきこるやうよ、見えけれを、
切れぬるなりけりとして、足を引きけれを、ちちを
ま、引きさしよてのぼりけり。其時、足よ、まといさる
尾を、ひきほどきて、足を、水よ、洗ひけれども、蛇の
あと、うせざりけれを、酒よ、てぞ洗ふと、人のひ
けれを、酒とりよ、やりて、洗ひなどして、後よ、従者
ども、呼びて、尾のかさを、引きあけさせうりけれ
を、大きなりなども、おろちなり。切りちちの大き

つゝり、一尺をうりあるうんとぞ見えける。頭の
かこの、きれをみせよやりうりけれむ、あやうこの
岸よ、大きなる木の根の有りけるよ、頭のかこのを
あまうかへりまといひて、尾をさしおろして、足を
まといひて、引くなりけり。力のおろりて、中よりき
れよけるなあり。我身のきうくをも知らず引き
けん、あさましき事なりうり。其後、うちをその力
のほど、いくうりむりりの力よろありと、くうら
みんとて、大きなる繩を、蛇のまきうる所よ、つけ
て、人十人をうり志て、ひうせけれども、猶たらず

くといひて、六十人をうりかへりて、引きける時よ
ぞ、かをうりも、おぼえしといひける。それを思ふ
よ、経頼が力を、さを、百人をうりが力を、もくうよ
やとおぼゆるなり。

仲胤僧都連歌の事、

これも、今をむうし、青蓮院の座主のもよへ、七宮
渡らせ給ひうりけれむ、ゆつれぐ、ちうくさめ参ら
せんとして、若き僧綱有職なご、庚申して遊びける
まうくうらもの、いと憎まげなるが、瓶子こりな
どしありきけるを、ある僧忍びやうよ、くうら

と、大童子もも、おとりつりと連歌も志つりける
を、人々志を、案ずるほどよ、仲胤僧都その座
もありけるが、や、胤もやうつけつりと、いひけ
れも、若き僧も、いうたと、顔をまもりあひ侍り
けるよ、仲胤祇園の所會を、待つをうりなりと付
けつりける。これをおのく、この連歌も、いうたつ
けつるぞと、忍びやうよ、いひあひけるを、仲胤聞
きて、や、いひつり連歌もよ、つうぬとつけつるぞ
うと、いひつりけれを、これを聞きつて、つる
物ども、一度よ、つと、つよみ笑ひけりつと。

つうぬの下も
よたといふ語の
あるべきを暗せ
り。

頼時が胡人見つる事

今をむく、胡國といふを、唐よりも、もつらみ北
ときくを、奥州の地よ、つづきつるよ、やあんと
て、宗任法師とて、つづきあり、が、かたり侍り
けるなり。この、宗任の父を、頼時とて、みちの國の
えびすも、おほやけよ、志つがひ奉らふとて、攻
めんとせしけれけるほどよ、いづくより、いまよ
いづるまで、おほやけよ、勝ち奉るものなり。それ
を、すぐさずと思へども、責をのみかうがれを、も
るくべきか、さなきを、おく地より、北よ見可ささ

る、地あんなり。そこよ渡りて、ありさまをみて、
さても、ありぬべき所をうだむ、それよ志さぐみ人
のかぎりをも、みなるて、さうして、すまんとひいて、
先づ、舟一つをととのへて、それよのりて、行きた
りける。人々、頼時、厨川の次郎、鳥海の三郎、さそ、
まさ、むつま、ぶき郎等ども、二十人をうり、食物、酒
など、多く入れて、舟をおごりて、くれむ、いづこも
も、さうらぬほどよ、見渡さうり、くれむ、渡りけり。
左右も、さうらなる蘆原でありける。大なる川の、
湊を見つけて、其湊よさうり、入れよけり。人や見ゆ

ると、見けれども、人げも、な。陸よのぼりぬべき、
所やあると、見けれども、蘆原よ、道ふみさう方
も、なうり、くれむ、若し、人げする所やあると、川を
のぼり、さまよ、七日までのぼりよけり。それがたぶ
おな、ドやうなり、くれむ、あさま、きさ、さうなと
て、猶、廿日むうり、のぼり、くれども、人のけさ、ひも、
せざり、けり。三十日むうり、のぼり、けるよ、地のひぶ
くやう、み、くれむ、いづなること、の、あるやうと、
おそ、ら、く、て、蘆原よ、さ、か、れ、て、ひ、び、く、やう
よ、する、か、さ、を、の、ぞ、き、て、見、け、れ、を、胡、人、と、て、繪、よ

かきこも姿志こももの、赤き物よて、頭ゆひこ
るが、馬よ乗りつれて、おちおでこり。これを、いつ
なるものぞと、見る程よ、おちつづき、数志こらず出
できよけり。河原のまこよ、集まりまちて、聞きも
志こぬことを、さくづりあひて、河よ、まらくと
ち入れて、渡りけるほどよ、千騎斗やあんとぞ、
見えまこも。これが、足音のひびきよめて、まらこよ
聞きこえけるなりけり。おちの物を、馬よ乗りこ
るもの、そまよ、引きつけこもて、渡りけるを
ま、たぐ、おち渡りける所を、めりと見けり。廿日を

なかりよの
ふ文字を語つて
かりよなる
べし。

申しけるを申し
けりとあるべき

かりのぼりつるよ、一とこちも、瀬をかりよ、川
なれを、かれこを渡る瀬なりけれと見て、人過ぎ
て、後よ、まよせて、見れむ、同一やうよ、そこひも
志こぬ、瀬よ、そなんありける。馬袋をつくりて、お
よがせけるよ、おち人も、それよ、とりつきて、渡り
けるなるべし。なほ、のぼるとも、まらこもなくお
ほえけれむ、おちこも、こて、それより、帰りよけり。
さて、いづこも、まなく、こて、頼時を失せよける。さ
れど、胡國と、日本の東の、おくの地とを、まらこあひ
てぞ、あんなると申しける。

賀茂祭のかくり、武正兼行、御覽の事、

これも、いまをむらう、賀茂祭のともよ、下野武正、
秦兼行、つかも、うけり。そのかくさ、法性寺殿、
紫野まで、御覽下けるよ、武正兼行、殿下御覽す
とありて、ことよ、引きつらひて、渡りけり。武正
ことよ、氣色して、さる。次よ、兼行、又さる。おの
く、どりぐよ、いひしらす。殿御覽下て、今一度、北へ
さると、仰せありけれを、まよ、北へさるりぬ。さ
て、あさづきさるぬを、まよ、南へかくりさる。次よ、武正、
このさびも、兼行、さきよ、南へさるりぬ。次よ、武正、

つらうんと、人々、侍らほども、武正、やう久
しく見えず。こと、いうたと、思ふほども、むらひよ、
引きつら、慢より、東を渡るなりけり。いうらくと、
待ちけるよ、慢より、冠の、こど、さるりみえて、南へ
さるりけるを、人々、なほ、さるりきもの、心ぎを
なりと、ほめけりとう、

門部府生、海賊射返す事、

これも、いまをむらう、門部の府生といふ、舎人あ
りけり。さるり、身をまがうて、さあけりけるよ、ま
きを、このみて射けり。よるも射けれを、さるりな

我家もかくても
我れ家もかくて
の意をさすべし。

このたきやう
たきつたてあつ
べき所なり。

る家のふき板をぬきて、ともして射けり。妻も、こ
のこをうけず。近邊の人も、あをれよしなきこ
と、志給ふものおなとりくども、我家もなきて、ま
どろんと、たれも、何うくるしうるべきとて、なほ
ふき板を、ともしてゐる。これを、誂らぬもの、ひと
りもなし。かくするほどよ、ふき板、みなうせぬ。そ
てよも、たるき、こまひを、とりたきつ。まゝ、後よも、
棟、うつむり、焼きつ。後よも、けし、柱、みな、とりたき。
これあさましきもの、さまかたを、いひあひし
るほどよ、板、き、志、け、ま、でも、みな、とり、焼き

て、隣の人の家、よやどり、こりけるを、家主、この人
の、やうぶいを見るよ、この家も、こぼちたき、なん
ずと思ひて、いとくども、さのみ、うそ、あれ、待ち給
へ、なごいひて、すぐるほどよ、よく射るよ、きこ
えありて、めし、おぼされて、賭弓つううまつるよ、
めで、こい、い、けれを、敵感ありて、を、そ、ま、相撲の
使ひ、よ、こ、ごりぬ。よき相撲ども、多く、備へ、おでぬ。
まゝ、敷き、うす物、まうけて、のぼりけるよ、か、う、ぬ
島といふ所も、海賊の、あつまる所なり。過ぎ行く
ほどよ、ぐし、くるもの、こい、やう、あれ、御覽候へ

あの舟共も海賊の舟どもよこそ候ふめれ。こそ、
いづせせ給ふべきといふを、此かどくの府主、
いふやうをのこなきをいふ。千萬の海賊ありと
も、いま見よといひて、皮子より、賭弓の時着り
ける装束、とりいづ、うらましく、志やうどきて、
冠老懸などあるべき、定ぬ志ければ、従者ども、
こそ、物よこせ給ふ、叶をぬまでも、楯つき
など志給へといひ、いづめきあひこり。うらま
く、とりつけて、かぬぎて、めで、うら見まそ
て、屋形のうらま、いまま、四十六ぶよより

いづめきあひ
めくは同じ

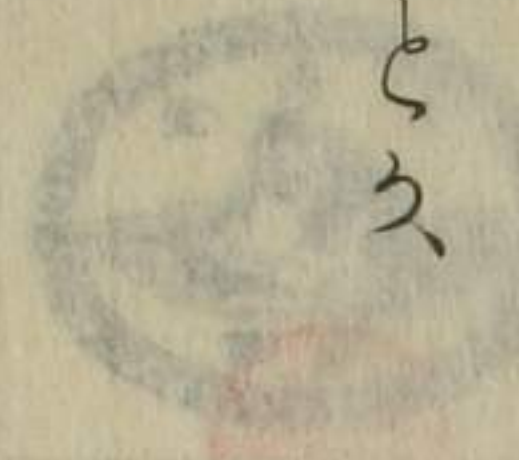
きよらうといふを、従者ども、大うらま、かか申
すよ及むとて、黄水をつきあひこり。いづたか
く、よりきよらうといふを、四十六ぶよ、ちかづ
きさぶらひぬらんと、いふときよ、うらま、やう
いづ、あるべきやうよ、ゆらち、そ、弓をさか
び、て、志む、ありて、うらあげ、これ、海賊がむ
ねとのもの、黒をみ、うら物着て、赤き扇を、ひらき
つらひて、さく、漕ぎよせて、乗りうつりて、うら
いづれといふも、この府主、駭かず、そ、引きか
とめて、とらくと、うらち、うらち、見やれを

この矢、目もみえずして、むねとの海賊がゐる
るところへ入りぬ。ちやく、左の目も、このいづづ
き、たちよけり。海賊、やといひて、扇をたげすま
のげぎまよ、たふれぬ。矢をぬきてみるよ、うるそ
しく、戦ひをどする時のやうもあらず、ちりむ
かりの物をやり。これを、この海賊どもみて、やく、こ
れそ、うちある矢も、あうざりけり。神箭をりけ
りといひて、としくおのく、こぎもどりぬとて、逃
げよけり。そのとき、門部府生うすこらひて、また
かーらがまへよと、あぶなくたつ、やつをうらかな

うすこらひて、あぶなくたつ、やつをうらかな

おとこらうけり
の下まを、これか
なまこいふべきを
略せり。
けりといふ、けり
とありとあるべき
所なり。

といひて、袖うちおろして、こつをきてきて、るこ
りけり。海賊、さうぎ逃げくるほどよ、ふくらひと
つなど、少々物どもおとこらひける、海よりうひ
とらひければ、この府生、とりて笑ひて、るこらひける
と云、



装本 東京堂 宮川保
発行元 東京堂 十一堂 長谷部仲彦

和文教科書 八之卷 終

Handwritten text in a box at the top of the right page, possibly a library or collection stamp.

Main body of handwritten text on the right page, likely the start of a lesson or chapter.

明治二十年九月十三日版權免許
全 同月 出版

第一帙定價金五拾錢
第二帙定價金五拾錢
第三帙定價金五拾錢
第四帙定價金五拾錢

編輯人

下田 歌子

出版人

平尾 錦藏



製本兼
發兌元

中央堂

宮川 保全

發兌元

十一堂

長谷部 仲彦

賣捌

東京日本橋區本町三丁目
大阪心齋橋通北久寶寺町

瑞穂屋
三木 佐助

